

# 山東における海龍王信仰の調査研究

——円仁の『入唐求法巡礼行記』を中心に——<sup>1)</sup>

朱 紅 軍

## The Dragon King Faith in Shandong: Focus of Ennin's *The Record of a Pilgrimage to China in Search of the Law*

ZHU Hongjun

During the Tang dynasty, Shandong was situated in a pivotal geolocation between the region of Korean Peninsula, Balhae and Japan. According to Ennin's *The Record of a Pilgrimage to China in Search of the Law*, some of religious facility, such as Dragon King's Temple, the Dragon King's palace, MingWang's Temple, etc., were excited around the coast of Shandong. Which meant that, the extension of Dragon King's Faith around the coast of Shandong has been recorded not later than the 9th century. On the other hand, the worship of the gods of heaven and earth, such as Sumiyoshi no Okami, Hachiman, Funadama, Dragon of the Sea, Five Dragon King, god of thunder, god of stone, the gods of the mountains and islands in Dengzhou, etc., by the Japanese missions to Tang China, was also noticed in Ennin's book.

Keyword: Dragon King, Shandong, Ennin, The Record of a Pilgrimage to China in Search of the Law

キーワード：龍王、山東、円仁、『入唐求法巡礼行記』

### はじめに

九世紀の東アジア海域においては、それまでの海域交流の主軸であった外交使節やその遣使に随伴した僧侶に加えて、新羅や唐の民間貿易商人たちが海を頻繁に往来しはじめるという新しい歴史状況が生まれた。東アジア海域において、活躍していた人々は常に自然の脅威にさらされ、死と隣り合わせであった。そのため、彼らが海の神を祭りながら、大自然へ安全を求めることは当然のことであろう。

唐代の山東は、朝鮮半島、渤海そして日本との間に、政治的、軍事的および文化的交流がその海上交

---

1) 本研究は、日本科学協会の笹川科学研究助成による助成を受けたものです。

通によって実現され、非常に重要な位置を占め、重要な役割を果たしていた。新羅・渤海と前期の日本遣唐使はほぼ山東半島に上陸し、そこから長安に行った。唐の初期、高句麗や百済、新羅と戦争した際も、唐王朝の水軍も山東沿岸部の港から出航した。九世紀には外交使節や僧侶に加え、商人もしだいに東アジア海域に登場した。これははじめての海洋活動の盛んな時期となった。航海信仰がどのような様相を呈していたのかについて検討する価値も大いにあろう。日本入唐僧円仁が記した『入唐求法巡礼行記』<sup>2)</sup>によれば、山東半島の沿岸部では多くの新羅人が活動しており、山東半島北部の登州に、新羅館・渤海館<sup>3)</sup>があり、南部の沿岸部には邵村浦・乳山浦・赤山浦・旦山浦・駐馬浦・岬山(浦)・長淮浦<sup>4)</sup>などの港があったという。それだけではなく、『入唐求法巡礼行記』によると、円仁が乗った日本遣唐使の船には、観音菩薩・住吉大神・龍王(海龍王と五方龍王)・主舶の神(船の神)・霹靂神(雷神)・八幡大神・登州諸山島神などたくさんの航海神が祀られていた。一方、唐の海州や登州には龍王廟や龍宮、そして堯王廟や明王廟などの地方信仰に関する内容が記されている。

本研究は、円仁の『入唐求法巡礼行記』を中心に、山東沿岸部およびその海域における航海信仰を取り上げ検討したい。

## 一 龍と龍王

世界の龍は東方の龍と西方の龍に分けられ、中国の龍とインドのナーガは東方の龍の代表と言える<sup>5)</sup>。中国の龍はトーテム崇拜、神霊崇拜、帝王崇拜との習合、インドのナーガとの習合の四段階に分けられる<sup>6)</sup>。文献史料から見れば、早くとも『史記』『淮南子』『山海經』から、その姿を断片的に窺うことができる。また、中国の神話には盤古が龍身あるいは龍頭蛇身という形で登場し、伏羲と女媧とも龍身(蛇身)という形で登場したのである<sup>7)</sup>。信立祥が中国漢代画像石の分布は五つの地域にわけられ、発祥地と集大成と言えるところは第一区分である<sup>8)</sup>。山東における漢代画像石墓には龍の画像があるところは24箇所ある<sup>9)</sup>。数から見れば、第一区分の五割を占めている。

2) 入唐僧円仁(794-864)は、下野都賀郡の人である。十五歳のころ最澄に師事し、838年7月請益僧として遣唐使に従い入唐。円仁は、帰国まで山東に三回滞在し、登州・萊州・青州・淄州・齊州・密州などほぼ山東全域に足跡を残している。唐代の山東について、円仁の書『入唐求法巡礼行記』には、多くの内容が伝えられている。

3) 円仁著、顧承甫・何泉達校『入唐求法巡礼行記』巻二(上海古籍出版社、1986)、86頁。

4) 円仁著、顧承甫・何泉達校『入唐求法巡礼行記』巻二、巻四(上海古籍出版社、1986)、55頁、56頁、61頁、63頁、64頁、199頁、201頁。

5) 荒川紘、『龍の起源』紀伊国屋書店、1997年。西方の龍はバビロニアのティアマト、エジプトのウラエウス、イスラエルのレヴィアタン、ギリシアのドラコーン、ヨーロッパのドラゴンなど挙げられる。

6) 何星亮「中国龍文化的發展段階」(『雲南社会科学』6号、1999年)。

7) 笹間良彦『図説 龍とドラゴンの世界』(遊子館、2008年)。

8) 信立祥『中国漢代画像石の研究』(同成社、1996年)。第一区分とは、山東省全域、江蘇省北部、安徽省北部、河南省東部と河北省南部という地域である。

9) 周正律「漢代画像石における龍の図像について―第一分布区篇―」(『文化交渉：東アジア文化研究科院生論集』6号、2016年)、119-120頁。

管見の限り、『道德指帰論』には鱗者水居、而神龍王之<sup>10)</sup>と、はじめて「龍王」という単語が出現した。龍王と水との関係も直接記している。その後、西晋月氏国三蔵竹法護が訳した『仏説海龍王經』には「海龍王」という単語が頻繁に出てくる<sup>11)</sup>。また、仏駄跋陀羅と法顕により共訳された『摩訶僧祇律』には、「持國龍王伊羅國龍王善子龍王黑白龍王」の四大龍王の表現が見られることから<sup>12)</sup>。龍王の出現は仏教との関係が大きいと考えられる。この時期から、龍王と水との関係が多くなり、以前の龍王と異なる性格になった。

龍王と方位と結合する文献と言え、仏教の『仏説灌頂神呪經』と道教の『太上洞淵神呪經』の二つがあげられる。東晋天竺三蔵帛尸梨蜜多羅の訳になる『仏説灌頂神呪經』第九卷の「仏説灌頂召五方龍王攝疫毒神呪上品經」には、「東方青龍神王」「南方赤龍神王」「西方白龍神王」「北方黒龍神王」「中央黄龍神王」についての説明がある<sup>13)</sup>。道教經典と言え、『太上洞淵神呪經』龍王品に「東方青龍神王」「南方赤龍神王」「西方白龍神王」「北方黒龍神王」「中央黄龍神王」の五方龍王に関する記載もある<sup>14)</sup>。しかし、この經は東晋末期から劉宋初期にその最古層部が成立したとされ、その成立には仏典が影響している<sup>15)</sup>。しかし、関の研究によれば、『仏説灌頂神呪經』は後の時代に成立した偽經で、成立過程においては中国の伝統五方文化も借用されていると述べている<sup>16)</sup>。

管見の限り、航海中の信仰対象としての観音菩薩は東晋法顕の『仏国記』まで遡ることができるが、その時代の航海信仰としての龍王信仰の存在はまだ確定できていない<sup>17)</sup>。南北朝の仏陀耶舎と竺仏念らとともに訳した『四分律』卷46には、

（前略）善行教授眾賈人已。更詣餘處。惡行王子。以惡言向眾賈人說之。善行王子若安隱還至當奪汝等寶。曼今未還。可推船置海而去。時惡行說五百賈人。賈人已受其說。推船入海而去。彼薄福果報風破其船五百賈人沒海而死。惡行王子得一船板。風吹展轉得還趣岸。彼於海邊在貧賤聚落。家家乞食自活。時善行還至故處不見眾賈人。亦不見船。即便椎胸啼泣懊惱。恐諸賈人為惡鬼羅刹等所害。時寶渚神語善行言。五百賈人非惡鬼羅刹等所害。是惡行王子惡言。（中略）彼遙見金城中有一金床。龍坐其上。時善行王子。即往金城至彼龍所。時龍王遙見慰問。善來童子。欲何所至。答言。龍王知不。閻浮提眾生皆多貧苦。我欲至海龍王宮取如意珠令閻浮提人無有貧苦。彼即答言。海龍王宮難可得至。七日中行水常至膝。復七日中行水至臍。七日中行水至腋。七日中浮而過。七日中行蓮華上。七日中行毒蛇頭上。然後乃至海龍王宮。汝今可止。我有寶珠。能雨東方二千由旬七寶。今當與汝。

10) (漢) 嚴遵『道德指帰論』卷五（明津逮秘書本）。

11) 『大正新脩大藏經』第十五冊經集部二 五九八『佛説海龍王經』。

12) 『大正新脩大藏經』第二十二冊律部一 一四二五『摩訶僧祇律』四十卷比丘僧戒法卷二十 單提九十二事法之九。

13) 『大正新脩大藏經』第二十一冊密教部四 一三三一『佛説灌頂經』十二卷佛説灌頂召五方龍王攝疫毒神呪上品經卷第九。

14) 『正統道藏』第一百七十～一百七十三冊 洞玄部本文類『太上洞淵神呪經』十三卷龍王品。

15) 門田誠一「日本古代における五方龍関係出土文字資料の史的背景」（『仏教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』第8巻、2012年）。

16) 関祥鵬「五方龍王与四海龍王的源流」（『民俗研究』3号、2008年）。

17) 法顕『仏国記』（中華書局、1991年）。

答言不取要當至海龍王宮。即復問言。欲取何乘。答言。欲取大乘。復言。若汝成最正覺者。我當出家為汝作第一智慧弟子。即捨金城（後略）<sup>18)</sup>

と記されている。龍宮の話も出ており、商人・海難・龍宮・如意宝珠などの事象は同じ説話に出現した。南北朝時代以後、龍宮と海難との繋がりが一層強くなったと考えられる。

## 二 遣唐使の龍王信仰

### 1 円仁とその航海

平安時代はじめての承和五年（838）、前回の派遣から約30年ぶりとなる遣唐使が派遣された。実際に入唐した最後の遣唐使となったこの一行は、そのときの年号にちなんで「承和の遣唐使」と呼ばれる。この遣唐使の一員として入唐した天台僧・円仁の日記『入唐求法巡礼行記』には、その航海の詳細が記されている。

円仁の日記によると、唐にむけて東シナ海を航海中の船上で、遣唐大使の藤原常嗣が観音菩薩の絵を描かせ、同船する僧たちに読経して祈らせたことがある。また、海難に遭う時に、観音菩薩・妙見菩薩の名を呼んで、助けてもらう記述もある。しかし、この時には、海龍王に関する祭祀記事は見られない。それから、円仁が天台山へ行けず、遣唐使と共に帰国の道に辿った。その時、住吉大神という日本の神が登場した。円仁は海州<sup>19)</sup>で遣唐使の船から降りて不法滞在しようとしたが、当地の新羅人に見破られ、軍官に発見された。それから、円仁はちょうど海州の海岸に泊っている遣唐使第二船まで送られた。その後、山東半島の海岸に沿って日本まで航海する。その途中で、住吉大神・八幡大神・海龍王・五方龍王・船玉・霹靂・石神・登州諸山島神などの天神地祇を祀ったとされている。それだけではなく、山東半島の沿岸部については、海龍王廟・龍宮・明王廟など宗教施設の存在が記されている。

### 2 承和度日本遣唐使の龍王信仰

当時の人々にとって、波が高い外洋を船で乗り切ることは大変な難事であったため遣唐使は航海の安全と任務を無事に果たせることを海に鎮座している神々に祈った。例えば、承和度の遣唐使は山東の海域で航海するとき、海龍王や五方龍王を祀ったとされている。

（開成四年四月）十八日，（中略）請益僧為早到本國，遂果近年所發諸願，令卜部祈禱神等。火珠一箇祭施於住吉大神，水精念珠一串施於海龍王，剃刀一柄施於主舶之神，以祈平歸本國。<sup>20)</sup>

18) 『大正新脩大藏經』第二十二冊律部一『四分律』卷四十六破僧撻度第十五。

19) 海州は今の江蘇省連雲港市であるが、歴史上には山東と深く関わりがあり、同じ文化を共有している。

20) 円仁著、顧承甫・何泉達校『入唐求法巡礼行記』巻一（上海古籍出版社、1986）、46頁。

（開成四年五月）六日，（中略）晚頭，祭五方龍王，戒明法師勾當其事。<sup>21)</sup>

（開成四年六月）五日，（中略）舶上官人驚怕殊甚，猶疑冥神不和之相，同共發願兼解除，祈祠船上霹靂神，又祭船上住吉大神，又為本國八幡等大神及海龍王，并登州諸山島神等，各發誓願（後略）<sup>22)</sup>

と，龍王を祀る記事が三度ある。また，海龍王に「水晶念珠」を海に投じる記述もある。海神投供を通じて，海の神から保護をうける習慣は古くからずっと残っている。遡ると、『仏国記』にも，海で嵐に遭って，商人や法頭らが「粗財貨・軍持・澡灌及び余物」を海に投じる記述がある<sup>23)</sup>。

五方龍王と海龍王の両方とも祀られていると記している。海龍王はもちろん，五方龍王も水とも深くかかわりがあるものである。

また，遣唐使は日本から唐に渡る道中で観音菩薩や妙見菩薩を祀ったことや，揚州から海州までの帰国途中に住吉大神を祀った記録はのこされているが，五方龍王と海龍王に関する記述はない。しかし，山東海域を航海中の記録の中に，龍王信仰に関する記述が三度出てきた。山東海域で龍王信仰が盛んであったことを物語っている。

### 三 海州の龍王信仰

#### 1 海州龍王廟

円仁の揚州から天台山に行く要求は唐朝廷から認められず，円仁は帰国の船に乗った。楚州を出発した遣唐使一行は，新羅船に分乗して海州の管内である東海県のあたりに到り，そこで一時停泊した。唐に不法滞在してでも仏法を学ぼうとした円仁は，この際に日本へ向けて出発する遣唐使一行と分かれることになる。円仁ら四人は海州で遣唐使の船から降りて，当地の宿城村に滞在しようとしたが，村民に見破れられ，軍官に預けられた。また，軍官が彼らを州まで送る途中で，東海県の官吏と話し，県令の李夷甫は押衙の張実に頼んで，新面を州刺史に渡した。その後，「小海」のところに着いた。

（開成四年四月）八日早朝，（中略）縣令李夷甫以新麵二斗寄張押衙獻州刺史。第二船在前路小海，押衙道：「此縣是東岸，州在西岸。良判官緣病來上舶船。從此小海西岸有海龍王廟，良判官只今於此廟裏安置。今擬往彼良判官處，令相看」云云。上帆直行，從舶邊直過。僧等且欲上舶，押衙不肯。未時，到海龍王廟，相看良岑判官，粟錄事，紀通事，神參軍等，具陳留住之由，兼話辛苦之事。判官等聞之，或惆悵，或歡來。此間，其和錄事病在舶上，法相請益戒明法師，并新羅譯語道玄等，同在舶上。乍到得相看，押衙云：「三僧入州，略看大夫，便合穩便。」僧等三人相隨押衙入州去，從神廟西行三許里，到州門前。押衙及將等先入內報，少時，喚僧等且入。至刺史前，著椅子令座，問拋

21) 円仁著，顧承甫・何泉達校『入唐求法巡礼行記』卷二（上海古籍出版社，1986），58頁。

22) 円仁著，顧承甫・何泉達校『入唐求法巡礼行記』卷二（上海古籍出版社，1986），61頁。

23) 法頭『仏国記』（中華書局，1991年）。



卻之由，令押衙申。刺史姓顔名措，粗解佛教，向僧等自説。語話之後，便歸神廟。刺史顔大夫差一軍將，令相送僧等三人及行者，暫住海龍王廟。(後略)<sup>24)</sup>

と、「小海」にあり，東は県で，西は州である。「小海」の西岸には「海龍王廟」があることが記録されている。日本から遅れて出発した日本遣唐使第二船はちょうどこの龍王廟に泊っている。その後，円仁一行四人は海州まで送られ，尋問を受けた後，また海龍王廟に戻って遣唐使と合流した。

## 2 海州龍王廟の歴史

海龍王廟の場所を考察すると，やはり『入唐求法巡礼行記』に基づき，唐代の海岸線を含めて検討する必要がある。『中国歴史地図集隋唐』から見れば，その時の連雲港の海岸線は現在の海岸線よりだいぶ西に寄っていた。



写真1 円仁入海州路線図（連雲港博物館にて撮影）

小野勝年は、『海州直隸州志』によれば，州内に数カ所の龍王廟を数えることができる。同書卷二九には「龍神廟。在州治東五里網瞳村。元至正二年建」とある。元代建立の廟であると記しているが，そ

24) 円仁著，顧承甫・何泉達校『入唐求法巡礼行記』卷一（上海古籍出版社，1986），42-44頁。

の地点から考えて行記の廟に近い。すなわちこれには州治の東五里とあるが、行記には三里とあって相近く、元建とあるも、あるいは再建と考えられる。」との注釈を付けている<sup>25)</sup>。白文化は小野勝年の注釈を参照し、「很可能是唐代在附近建有廟宇」周辺には唐代に寺院を立てたと述べている<sup>26)</sup>。趙旭の「円仁入唐海州路線考」にも、円仁の移動路線について詳しく考察し、海龍王廟は「唐海州城東、錦屏山東北方向」と指摘している<sup>27)</sup>。以上の考察に基づき、円仁が記した龍王廟は現在の「孔望山」の龍洞庵の近くではないかと考えている。孔望山は連雲港市海州城の東にあり、孔子がこの山に登り東海を眺める伝説をもって「孔望山」の名になった。現在は観光地になった「孔望山」には後漢時代の石刻と石象、石蛙も残っている。石刻には道教の人物が四尊、仏教人物が八十五尊刻まれている。漢代から、この地域は宗教信仰が盛んな地域であることを物語っている。

宋の洪適が編集した『隸釈』巻二に所蔵されている後漢靈帝熹平元年（172）立てた『東海廟碑』というものがある。洪適が「將士往來胸山者云：海廟一椽不存」と記していることから、海廟は胸山にあることは間違いなく<sup>28)</sup>。胸山という山は史料から見れば、現在の孔望山とほぼ同じである。また、孔望山には遺跡がたくさん発見されたことから、ここは後漢時代の東海廟ではないかと推測されている<sup>29)</sup>。『南史・陰子春伝』に「子春仕歷位胸山戍主，東莞太守。時青州石鹿山臨海，先有神廟，刺史王神念以百姓祈禱糜費，毀神影，壞屋舍」<sup>30)</sup>と胸山戍の近くの（南）青州には石鹿山神廟がある。漢代の東海廟や南北朝の神廟と円仁が記した海龍王廟（神廟ともいう）と同じ廟であり、違う時代の違う名称であると考えられる。

また、孔望山龍洞庵の隣に位置する龍洞の両側にも宋代から清代までの石刻が刻まれている。その中に、宋代元符二年（1099）の石刻によると、こちらは「龍興山寺」があることが分かった。この碑文は明代の安鈍石刻に覆されていて、文字を読み取ることが難しかったが、2015年に出版された碑文資料集<sup>31)</sup>から内容がほぼ確認でき、「元符二年十月丁卯，曾肇□劉握□□□□王律滿損之遊龍興山寺」と記している。宋代以後、寺院になったか、あるいは龍王廟の近くに寺院を建立したかは確認できないが。龍洞庵や龍洞など、龍に関係する名称となったのはやはり何らかの理由があると考えられる。また、「嘉慶二十一年八月四日，朝議大夫知海州事韓城師亮采致祭龍神廟過此，與僚佐同登，爰記歲月」という碑文もある。つまり、嘉慶年間にはまだ龍神廟であったが、いつの時代か「龍洞庵」に変わったのである。

以上、地方志や円仁の『入唐求法巡礼行記』から、唐代に龍王廟が存在していたことは明らかである。

25) 小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』巻一（法蔵館，1964年），510頁。

26) 円仁著，白文化ら校注『入唐求法巡礼行記校注』（花山文芸出版社，1992年），145頁。

27) 趙旭「円仁入唐海州路線考」（『唐史論叢』1号，2019年），135-150頁。

28) 洪適『隸釈・隸統』巻二東海廟碑（中華書局，1985年），30-31頁。

29) 恵多谷雅弘「多衛星データを用いた秦帝国の空間的考察」（『学習院大学国際研究教育機構研究年報』3号，2017年）89-112頁。

30) 『南史』巻六十四 列傳第五十四陰子春，1555頁。

31) 連雲港市重点文物保護研究所編『連雲港石刻調査與研究』（上海古籍出版社，2015），48頁。



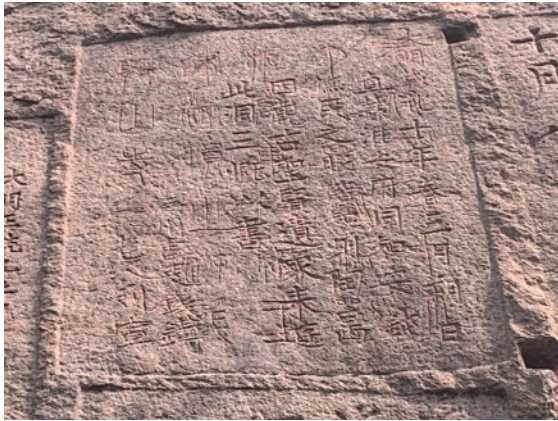


写真2 元符二年碑文（孔望山龍洞にて撮影）

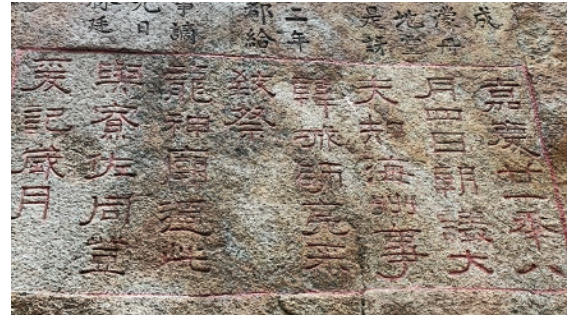


写真3 嘉慶二十一年碑文（孔望山龍洞にて撮影）

### 3 連雲港龍洞庵の調査

筆者が実際に孔望山に行って調査してみると、龍洞庵というところがある。龍洞庵の位置から見れば、旧県治と州城の間で、円仁が記した海龍廟の場所とほぼ一致する。しかし、龍洞庵現在では仏教の尼寺になっており、龍王信仰との関係はなさそうである。



写真4 龍洞庵の正門



龍洞庵の配置はかなり単純で、寺門・観音殿・地藏殿・大雄宝殿の四つの建物から成っている。庭には樹齢1230年の園柏が植えてあり、看板には「连云港龙洞庵内園柏始植于唐代，已有1230年树龄，高12.2米，胸径74厘米。树上有两个“瘤节”，传说一个形成要六百年」と、1230年の樹齢があり，唐代から植えたものを書いてあるが，具体的に判断できない。



写真5 園柏

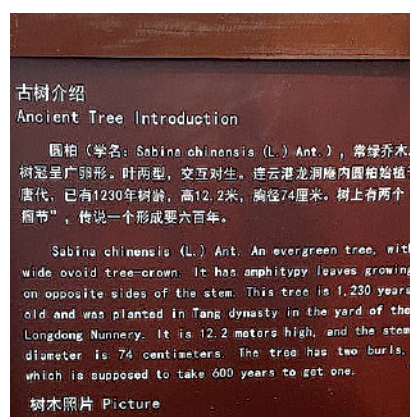


写真6 園柏の説明

また，龍洞庵の隣に位置する龍洞という洞窟がある。



写真7 龍洞



写真8 龍洞題刻の説明

洞窟の両側の壁には，宋代から清代までの名人が作った碑文はたくさん残っている。前文に引用した碑文の写真はここで撮ったのである。

## 四 赤山の龍王信仰

### 1 赤山の龍宮

円仁らは海州から遣唐使第二隻に乗り、山東半島の赤山まで航海した。求法のため、円仁らは山東半島の赤山で再び遣唐使の船から降りて滞在し、そこで、赤山法華院の僧侶から龍宮の話を聞いた。開成四年（839）9月12日の午後、天気が非常に悪く、雷と稲妻だけではなく、雹もたくさん降った。

（開成四年九月）十二日午時、雲雷雹雨。五更之後、龍相鬥鳴、雹雨交下、電光紛耀、數剋不息、到曉便止。朝出見之、冰雹流積三四寸許、凝積如雪。老僧等云：「古來相傳、此山多有龍宮。」<sup>32)</sup>

と、「震為雷為龍」という思想は『周易』に述べられている<sup>33)</sup>。「龍相鬥鳴」からも、雷電と龍と直接繋がっていることを述べている。その後、円仁は「古來相傳、此山多有龍宮」という赤山には古くから多くの龍宮があるとの情報を手に入れた。龍宮は主に海に存在するため、この場所は、龍王廟か龍王殿に相当する場所だと考えられる。

### 2 赤山と槎山の信仰

「東北方之美者、有斥山之文皮焉」<sup>34)</sup>と春秋時代斥山（赤山）<sup>35)</sup> 一帯は、毛皮産地として、有名であり、春秋時代から、広く知られるところとなった。

また、『齊乗』には、

五壘山 文登南五十里。南北成行入海，如壘。又南石門山，兩石聳立如門。今按，文登正南有鐵查山，東連斥山，甚奇秀，圖經弗載，豈古與斥山為一，或即五壘，石門之異稱歟？<sup>36)</sup>

と文登南五十里には五壘山という山がある。「古與斥山為一」と、鐵查山（槎山）と赤山繋がっているの、二つの山が合一の名称は五壘山ではないかと記されている。つまり、元の時代には、古代から槎山と赤山とは同じところと見なされていることが分かった。

また光緒年間成立した『文登県志』によると、

欽定皇輿全覽：鐵槎山相連九頂，南瞰大海絕頂大石之上。有龍窩，龍迹，有龍池，池水大旱不乾，有清涼頂，千眞洞，山東有石，名曰：上天梯以手拂石方能行，年久手印入石寸許，東頂有雲光洞，

32) 円仁著、顧承甫・何泉達校『入唐求法巡礼行記』卷二（上海古籍出版社，1986年），70頁。

33) 『重刊宋本周易注疏附校勘記』周易兼義卷第九說卦（清嘉慶二十年（1815）南昌府學刊本）。

34) 『爾雅・釈地』第九 九府条（台湾商務印書館，1965年）。

35) 斥山は赤山である。文献による表記も違う。

36) （元）于欽著・劉敦願ら校釈『齊乗校釈』（中華書局，2012年），58頁。

即王真人修煉處。東南有雲蒙山，山下有水簾洞，洞内有二石珠，每遇將大風雨珠盪激響如雷，土土人以卜陰晴焉。每歲元旦，水退可步至洞門外，窺之杳然無際。洞門題水簾洞三字，大如斗，過日則水勢，汪洋怒濤洶湧。舟人祇遙望之，非飛仙不能至也。明常康鐵槎山詩：群峰簇翠五雲中，眼界橫收六字空，山對鼇頭開貝闕，水環螺髻現珠宮，龍藏古洞風雲合，人泛仙槎霧雨濛，幻迹三山誰慣見，登臨縹渺盼仙翁

と書いてある<sup>37)</sup>。『欽定皇輿全覽』によると、槎山にはすでに「龍窩・龍跡・龍池」など龍に関する遺跡だけではなく、雲光洞や千真洞などの道教遺跡も存在していたようである。また、『山東通志』に槎山の廟について、「槎山神廟 在縣一百二十里鐵槎山」と記している<sup>38)</sup>。以上の史料から見れば、槎山というところに、神廟や、龍に関する遺跡、道教遺跡地が存在していたことが窺える。

現在の院弁龍王廟の隣に院弁村という村がある。『榮成市志』には「院弁，明天啓年間建村，因村臨院弁寺，故名。1330戸」と明代からこちらに村を院弁寺の横に建て初めたとある。院弁寺の建立年代について、資料がないため、検討し難いが、唐宋まで遡られると推測できる。姜の研究によると、前文『文登県志』に記している「千真洞」は王処一が作ったという説は誤りで、明代天啓七年（1627）に仏教の千仏洞から改造された<sup>39)</sup>。もし、そうであれば、院弁寺の千仏洞から改造されたのは間違いないであろう。また、現在院弁龍王廟の張道士によると、現在の龍王廟は2003年に当初の小さい龍王殿を拡大し、「財神殿」と「娘娘殿」を増設したのである。当初の龍王殿は単体建築で、古くから長く存在しており、院弁村が建立する前に既に存在していたという。明代天啓（1621-1627）年間以前に、すでに龍王廟が存在している。龍王廟は院弁寺とともにすでに古くから存在していたと言われているが、具体的にいつ建てたのかは、史料からは確認できない。

いずれにしても、この地域は、宗教で聖地として歴史が長く、影響力が強い場所であり、唐代からこの場所に龍王信仰が存在していたことが窺える。

### 3 槎山龍王廟の調査

2019年8月30日に筆者は関西大学の篠原啓方教授および韓国高麗大学崔熙俊教授とともに槎山龍王廟に行き調査した。

龍王廟は槎山の南側の海岸に建てられたもので、その前の道を横断するとすぐ近海の養殖場である。

37) (清) 李祖年修・于霖逢纂『文登縣志』卷一上（清光緒二十三年修民國二十二年鉛印本）。

38) (清) 岳濬修，杜詔纂『（雍正）山東通志』山東通志卷二十一（清文淵閣四庫全書本）。

39) 姜生「千真洞の変遷：槎山全真洞遷仏史跡考」（『歴史研究』6号，2013），59-70頁。





写真9 龍王廟の対面



写真10 龍王廟の正門

龍王廟の正門には「龍王廟」と書いてある。龍王廟の大門から入ると、両側に「財神殿」と「娘娘殿」が建てられ、「財神殿」の後ろにはいくつかの祠が建てられている。「財神殿」では「比干・関羽・趙公明」などの財神を祀っており、「娘娘殿」では「海神娘娘」を祀っている。「海神娘娘」は「媽祖」と見なされている。



写真11 財神殿（篠原教授撮影）



写真12 娘娘殿（篠原教授撮影）

また、「財神殿」と「娘娘殿」の真ん中に「龍王廟」が書いてある牌坊と階段があり、登ってみたら「龍王宝殿」である。



写真13 龍王宝殿



写真14 東海龍王

龍王宝殿の中に、五人の神を祀っている。各神体の位置は、真ん中が「東海龍王」で、左には「雷公電母」、右には「風師雨伯」である。



写真15 雷公電母



写真16 風師雨伯

## 五 登州の龍王信仰

### 1 登州の「明王廟」

また、開成五年（840）二月十九日に円仁は求法のため、赤山法華院を離れ、五台山に向けて出発した。その後、登州を経由した際に、登州城内の施設について詳しく記している。

（開成五年三月）二日，（中略）登州都督府城東一里，南北一里。城西南界有開元寺，城東北有法照寺，東南有龍興寺，更無別寺。城外側近有人家。城下有蓬萊縣開元寺，僧房稍多，盡安置官客，無閑房，有僧人來，無處安置。城北是大海，去城一里半。海岸有明王廟，臨海孤標。城正東是市，粟米一斗三十文，粳米一斗七十文。城南街東有新羅館，渤海館。從登界赤山到登州，行路人家希，惣是山野（後略）<sup>40)</sup>

と、開元寺・法照寺・龍興寺などの仏教寺院のほかに、明王廟もあったという。また、新羅館と渤海館のような新羅と渤海の施設を招待するところも記されている。明王廟について、魯西奇は「龍王廟」である可能性が大きいと指摘しているが、それ以上は詳しく論じられていない<sup>41)</sup>。

### 2 登州龍王廟の歴史

小野勝年は「明王廟」の明王は仏教の明王ではなく、中国固有の神とし、恐らく城北の老北山の山神であると指摘している<sup>42)</sup>。白化文は明王が古い時代の社神の旧称で、仏教明王もあるので、どちらか確定できないと注釈を付けている<sup>43)</sup>。

元代の于欽が書いた「齊乘」には「登州北三里海濱，田橫寨相對。本海神廟基，宋治平中，郡守朱處約以其地太高峻，移廟西置平地，於此建閣。實為山海登臨勝槩」<sup>44)</sup>と蓬萊閣の紹介がある。登州北三里的海辺にはもと海神廟があったと記されている。このところは円仁が記した明王廟と一里半の差に過ぎなく、同じところだと考えられる。また、「移廟西置平地，於此建閣」と記しているが、宋治平年間（1064-1067）に海神廟を平地に移り、蓬萊閣を建てた。

また、清代の地方志には、この廟を広徳王廟と記し、

「天后宮西，唐貞觀年建，元中統三十八年修，明洪武十八年指揮謝規監修，學士謝溥記，萬曆中參政李本緯知府徐應元重修即今龍王宮」<sup>45)</sup>と貞觀年間（627-649）に建てたものと紹介している。雍正『山東通志』にも「廣徳王廟，在府城西北祀東海神，唐貞觀中建」<sup>46)</sup>と、同じく唐貞觀年間（627-649）に建てた

40) 円仁著、顧承甫・何泉達校『入唐求法巡礼行記』巻二（上海古籍出版社，1986），86頁。

41) 魯西奇「漢唐時期濱海地域の社会與文化」（『歴史研究』3号，2019），15頁。

42) 小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』第二巻（法藏館，1966年），253頁。

43) 円仁著、白化文ら校注『入唐求法巡礼行記校注』（花山文芸出版社，1992年），223頁。

44) （元）于欽著・劉敦願ら校釈『齊乗校釈』（中華書局，2012年），456頁。

45) （清）王文燾修，張本纂『（道光）重修蓬萊縣志』巻之二（清道光十九年刻本）。

46) （清）岳濬修，杜詔纂『（雍正）山東通志』巻二十一（清文淵閣四庫全書本）。



ものとしている。

以上の史料によると、そこには、もともと「海神廟」があったのであろうと考えられる。また、現在は「天后宮」の西に「龍王宮」は建てられている。つまり、円仁が記した明王廟は「海神廟」で、「龍王廟」である可能性が高いということが分かった。

### 3 蓬萊閣龍王宮の調査

2019年9月1日に筆者は指導教授の篠原啓方教授および韓国高麗大学崔熙俊教授とともに蓬萊閣に行き、調査した。

現在の龍王宮は1984年に建てられたもので、正門・前殿・両廂・正殿・後殿からなっている。正門には三つの入り口があり、真ん中の入り口の上に「龍王宮」と書かれている。前殿の左右に「定海神」と「靖海神」は建てられており。両廂には、龍王とあまり関係ない「姓氏家訓文化展」が展示されている。



写真17 龍王宮



写真18 定海神



写真19 靖海神

正殿の入り口の柱には「龍酬丹崖所期和風甘雨」と「王応東坡之铸翠阜重楼」、殿額には「霖雨蒼生」と書かれてある。明楼の西側に「龍王宮簡介」と刻まれてある。殿内には高台が設けられ、東海龍王の坐像が安置してあった。東海龍王の両側には合計八位の神官が安置されており、東は巡海夜叉・千里眼・電母・雷公、西は赶魚郎・順風耳・風伯・雨神である。



写真20 東海龍王



写真21 赶魚郎・順風耳・風婆・雨神



写真22 巡海夜叉・千里眼・電母・雷公

正殿の北門の左右には「海邦万里慶安瀾，五湖四海降甘霖」，上には「風調雨順」と書かれてある。後殿には龍王の寝宮であり，明廊もあり，題詞もある。両側には「贈大聖定海珍千年魔尽，還八仙渡海宝物万里波平」，上には「福庇海邦」と書かれてある。殿内にも高台があり，龍王と左右嬪妃の座像が安置されている。両側には八名の婢女がいる。



写真23 龍王と左右嬪妃

以上、円仁が訪問した海州・赤山・登州の三つの地域の龍王信仰について分析した。また、この三つ地域の地方志などの史料から古代から現代までの変遷経緯を検討した。加えて、現時点に存在している龍王廟や龍王宮、龍宮庵などの宗教施設に行き調査したところ、唐代まで遡れると思われるものは存在しなかったものの、龍王信仰はある形式で現在まで継承されているといえよう。

### おわりに

山東半島は海洋文明の始まりが早く、朝鮮半島と日本列島との交流も頻繁な地域である。本研究は円仁の『入唐求法巡礼行記』を中心に、山東半島の龍王信仰の遺跡を史料と実地調査両方面から検討した。遣唐使は山東海域で航海していた時には龍王を三回祀ったことが記されている。また、九世紀に円仁が訪れた山東の沿岸部の海州龍王廟、赤山龍宮、登州明王廟（龍王廟か）には龍王信仰が存在していた。史料から分析すると、古くからその地域にはすでに信仰を集めているところで、現在の宗教施設と継承関係が窺える。実際に三つの地域に行き調査したところ、いくつかの変遷を経て、龍王信仰まだ残っていることが分かった。院芥龍王廟、蓬萊閣龍王宮は龍王を祀っているところで、連雲港の龍洞庵・龍洞は龍王を祀っていないが、龍との深くかかわりがあることが想定される。



